

研究ノート

## 読解指導法と豊かな読解力の育成

### —教材の特性を生かした効果的な読み—

創価大学教職大学院教職研究科教職専攻

松本佳子

#### I はじめに

教育基本法や学校教育法が改正されその規定にのっとり、平成23年度に新学習指導要領が全面的に実施となる。「生きる力」の理念は従前の学習指導要領から引き継がれているが、今回の改訂で「生きる力」は、基礎的・基本的な知識・技能とその活用、思考力・判断力等を重視していることが分かる。その背景には、PISAの2003年調査では読解力が大幅に低下し、2006年調査では、科学的リテラシー・数学的リテラシー共に、得点と順位が大幅に低下した結果がでた。特に読解力や記述式の問題の無答率が高いという傾向にあり、日本の生徒が最も不得手とするのは、自分の意見を言わせる課題解決型の問題であることが分かった。

今までの私自身の国語の実践を振り返ると、教材を通して自分の考えを深めたり、読解力を確実に身につけていけたりするような読解指導や学びができていたのだろうか。と反省ばかりが残る。また、国語は、全教科にも関わってくる重要な教科であるため、その要でもある読解の授業で児童が変わったとの実感をもった効果的な指導法と授業力とを身につけたいと思った。

これまでの自身の授業を振り返って見ると、教科書の指導書どおりの実践や発想力に乏しい授業を行っていた。ところが、創価大学教職大学院の長崎教授の提唱している「開かれた表現力」の読解の授業では、「表現に開く」読解の指導法では、自分で考え表現することで読解の力を高めていけることを学んだ。そこでは、従来の指導とは違う、教材の見方や学習者のどのような発言を価値づけて授業の展開をはかるかなどを学んだ。副題とした、「教材の特性を生かした効果的な読み」としたのは、「教材の良さを生かす」だけでなく、良さは良さなりの、欠点は欠点なりの特性を捉え、教材を生かした読解を目指した授業を展開していきたい。

今回教職大学院での学びを通し、説明文教材と文学教材の2つの教材の特性を生かし、表現に開く授業を展開し子どもの変容を捉えてみたいと考えた。教職大学院の特徴でもある実習研究に、大学院で得た理論を即実習校で実践できるメリットがある。

今回実習校に協力を得ながら2単元の授業を展開させて頂くことができた。教材の特性を生かし、どのように学習者が表現力を開き効果的な読みを深めることができたのか検証し、考察していきたい。

## Ⅱ 表現に開く読解指導

### 1 従来の読解指導と表現に開く授業

これまでの『読むこと』の学習の実態は、理解を目的とした表現活動（話し合い）が主流であった『読み書き関連』でいう『読むこと』の学習での『書く』作業も、いわば、理解することを目的とした表現活動が主であった。文学教材での初発の感想や主題を書かせることも、説明文教材で要点や要旨・要約を書かせることも、学習の目的は、理解にあった。理解するための書くでは、『閉じられた表現力』である。<sup>1)</sup>

以上のような主旨のことが、長崎伸仁氏の著書に述べられている。つまり、これまでの読解指導は、理解するための学習活動が主流のため「自分で考える」という表現することが鍛えられないというのである。このことを反映しているのが、PISA 調査での結果であろう。従来の読解指導での授業力についても、読解力の低下を招いた原因として次の点が挙げられている。

#### (1) 読解力の低下を招いた原因

##### 1. 教材を細かく縦に切る授業

- ・学習者の視野を狭くするような教材を細かく縦に切る授業では、学習者の論理的思考力や表現力は育たない。

##### 2. 小さな発問に終始する授業

- ・「小さな発問」は、学習者に「正答」を求めるばかりで、思考を促すものではない。

##### 3. 話し合いばかりの授業

- ・学習者に学びの実感や成長の実感を自覚させるためには、せめて最後は「個に帰す」必要がある。

##### 4. 書き過ぎる板書

- ・教室内を飛び交った言葉を、平面的に書き連ねるだけの板書では、学習者の思考は深まらない。

##### 5. 「閉じられた表現力」だけを求める授業

- ・筆者の意図を書かせたり、教科書の答えの部分を読ませたりするだけでは「閉じられた表現力」である。<sup>2)</sup>

これらのような課題を克服すべく、表現するために書き、表現するために読んでこそ「開かれた表現力」となり、学習者の「思考力」が鍛えられ育成されると考える。では、表現力を鍛えるためには、どのような授業力の要素があるのであろうか。長崎

教授は、以下のような要素を挙げている。

## (2) 開かれた表現力の授業力

### 1. 学習者の「つぶやき」が漏れる授業

- ・小さな発問からは「つぶやき」は漏れることはない。大きな発問を心がける必要がある。

### 2. 学習者が「自分の言葉」で語る授業

- ・教科書の叙述をそのまま読ませない。「同じです」を「よし」とはしない配慮が必要である。

### 3. 学習者の発言を価値づけられる授業

- ・同質の反応、異質な反応を適切に交通整理することが必要である。

### 4. 「ほめる」よりも「みとめる」授業

- ・学習者の発言に対する「うなずき」、「アイコンタクト」だけでも人を育てることになる。

### 5. 立体的な板書をつくれる授業

- ・学習者の「多彩な思考」を更に「深まりのある思考」へいざなうのが立体的な板書である。

### 6. 「個」から始まり「個」で終わる授業

- ・学習の最後に「個のまとめ」をすることで、学びの実感・成長の実感を味わうことができる。<sup>3)</sup>

これまで、私自身の実践授業を振り返った時、「教材を縦に細かく切る授業」や「小さな発問」に終始し「正答」ばかりを促していた。そこで、表現に開く授業を展開し学習者の変容やその有効性を検証したいと思った。以下説明文教材と文学教材の授業展開において検証、考察を行う。

## Ⅲ 実践事例

### 1 実践事例1：「じどう車くらべ」（1年・光村図書）の場合

#### (1) 教材の特性

説明的文章の指導では、「題名読み」から始まる指導はよく行われる。学習者の知識や経験を問い、その後内容の予想読みに移っていく方法が一般的であろう。「じどう車くらべ」でも題名から、語彙を拡充し、学習者の持っている知識や経験を引き出し、全員で共有していきたい。

この教材は、一年生で初めて本格的な説明的文章の読み取りを行う教材でもある。自動車の「仕事」と「つくり」を理解させるのを基本とするが、4種類の自動車の一つ一つ扱うのではなく、比較の観点を持ちながら学ばせたい。具体的には前時で習った自動車と本時で学習する自動車を比較することで違いを見つけ、自分の言葉で、論

理的に語れるような表現活動を展開させたい。

また、自動車の「仕事」と「つくり」とを結ぶ「そのために」という接続語などの文型も丁寧に扱いながら、音読を通して主語、述語の学習を体を通して実感させたいと考えた。「つくり」の文章構造では、自動車の主語が抜けているため、音読では、「そのために、トラックは、……。」「そのために、トラックは、……。」のように、あえて主語を入れて音読するように考えた。そのことで、主語、述語の役割を音読のリズムを通して理解できるようにしたい。

## (2) 研究仮説

- ① 「題名読み」で学習者から自動車の知識や経験を想起させることができるだろう。
- ② 自動車どうしを比べることで、自分の言葉で論理的に表現することができるだろう。

## (3) 単元指導計画（全7時間）

第1次 自動車の仕事とつくりを知り、自動車どおしを比べる。

第1時 題名読みをして、知っている自動車について話し合う。

第2時 バスや乗用車の仕事やつくりを知り、どうしてそのようなつくりになっているのかを話し合う。

第3時 トラックの仕事とつくりを知り、バスやじょうよう車との違いを考える。

第4時 クレーン車の仕事とつくりを知り、トラックとの違いを考える。

第5時 はしご車の仕事とつくりを考え、クレーン車との違いを考える。

第2次 他の自動車の仕事とつくりを考えて絵と文を考える。

第1時 他の自動車について調べ、文と絵をかいて、自分の作品が友達の作品とどのように違うのかを考える。

第2時 自分の作品と友達の作品とを比べる。

## (4) 教材の特性を生かした読解指導の授業展開

### 研究仮説①

i. 題名読み（第1次 第1時）

第1次 第1時 題名読みをして、知っている自動車について話し合う。

発問

今日から自動車くらの勉強をします。どんな自動車を知っていますか。

### ●題名読みの類型

1. 知識・経験を想起させる。
2. 内容を予想（期待）させる。

3. 語句・語彙指導的に扱う。
4. 題名の働きを考えさせる。
5. 内容との符号⇒付加・修正させる。<sup>4)</sup>

長崎氏は、以上の「題名読み」の類型として上記の5つをあげている。どの題名読みにするかは、教材の特性と学年の発達段階を考慮して行われなければならない。

本「じどう車くらべ」の題名では、「1. 知識・経験を想起させる」指導が適切だと考え実践した。以下の実態は、学習者の発言記録である。

●学習者の発言のまとめ

a. 自動車の種類……18種類

表1

仕事で使う自動車	工事で使う自動車	人を乗せる自動車	その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>・パトカー</li> <li>・タンク車</li> <li>・救急車</li> <li>・宅急便車</li> <li>・消防車</li> <li>・郵便車</li> <li>・はしご車</li> <li>・ソーラーカー</li> <li>・キャリアカー</li> <li>・ボトルカー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クレーン車</li> <li>・トラック</li> <li>・ダンプカー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タクシー</li> <li>・バス</li> <li>・乗用車</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レーシングカー</li> <li>・電気自動車</li> </ul>

b. 自動車と他の乗り物との違い

表2

自動車	電車・蒸気機関車
<ul style="list-style-type: none"> <li>・道路を走る</li> <li>・ガソリンで走る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・線路</li> <li>・踏切</li> <li>・駅</li> <li>・客車を引く</li> <li>・石炭</li> <li>・電車の方が長い</li> </ul>
自動車	バイク
<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人以上乗れる</li> <li>・タイヤ4つ</li> <li>・ヘルメットなし</li> <li>・ライト2つ</li> <li>・スタンドなし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人乗り</li> <li>・タイヤ2つ</li> <li>・ヘルメットあり</li> <li>・ライト1つ</li> <li>・スタンドあり</li> </ul>

●仮説の検証

以上が学習者の発言の一部であるが、知識や経験から数多くの車の種類が意欲的に表出された。28人中24人が発言しており、ほとんどの学習者から知識や経験に基づき述べられたことになる。また、蒸気機関車、電車、バイクなど、自動車との違いやその理由を述べるなかで自動車の特質をより理解していったように思う。教材に入る導入の部分のため、学習者の意欲を喚起させ教材に親しみを持たせるという観点から考えると大きな成果を得たことになる。そして、自分の言葉で語ることにより、生きた言葉となったように思う。自分の知っていることが述べられ、論理的に語れるという

ことは、入門期の発達段階でもできるという実感を得た。

今後、この積み重ねが大切であると考えます。課題としては、しばらく自動車の名前を聞き続けるという聞き手の立場からしては、長い間、最後まで聞く態度を保つのは難しいと感じた。また、多くの意見がでる中で、自動車について得意な学習者だけがどんどん発言してしまう傾向がある。学習者の思考の流れがそれないように、教師が上手く交通整理をしないといけないと感じた。

## 研究仮説②

### ii. 自動車の比較

第3時 トラックの仕事とつくりを知り、バスや乗用車との違いを考える。

発問

バス、乗用車とトラックとはどういうところが違うでしょうか。

#### ●バス乗用車とトラックとの違い

##### ○学習者の発言

- ・トラックは、人をたくさん運べない。
- ・バスや乗用車は、人を乗せられるけど、トラックは人を乗せないで、荷物をのせる。
- ・乗用車は荷物をのせられないから、トラックは、反対に人を乗せられないから、どっちも違うところがある。

##### ○ワークシートの記述

- ・バス、乗用車は人を乗せるけど、トラックは荷物を運ぶ。
- ・人を乗せる所と荷物を運ぶ所が違う。
- ・乗用車は、ドアが4つついているけど、トラックはドアが2つしかついていない。
- ・車の形が違う。

第4時 クレーン車の仕事とつくりを知り、トラックとの違いを考える。

発問

トラックとクレーン車とはどういうところが違うでしょうか。

#### ●トラックとクレーン車との違い

##### ○学習者の発言

- ・トラックには吊り上げるものがない。
- ・トラックは荷物を運ぶけど、クレーン車は重い物をのせる。
- ・トラックは、地面で荷物を運んで、クレーン車は空中で上のものを置いたりする。

##### ○ワークシートの記述

- ・クレーン車は荷物を吊り上げるけどトラックは運ぶ仕事をしている。
- ・トラックは脚がないけど、クレーン車は脚が4本ある。

- ・トラックは、荷物を運ぶけどクレーン車は重いものを吊り上げる。
- ・トラックは、タイヤが10個ついているけど、クレーン車はタイヤが4個である。
- ・クレーン車は、重い物を吊り上げられるけど、トラックみたいに思い荷物を載せられない。
- ・トラックには、丈夫な腕がついていなくて、クレーン車には丈夫な腕がついている。
- ・トラックには、腕と脚がついていないからトラックとクレーン車は違う。
- ・クレーン車は止まって仕事をするけど、トラックは走って仕事をする。
- ・トラックは、地面で荷物を運ぶけどクレーン車は空中で運ぶ。

●ワークシート例



じどう車くらべ  
トラックは、  
しごとをしています。  
そのために、トラックは、  
います。  
そのため、トラックは、  
います。  
○バス、じようやう車とトラックはどう  
いうところが、ちがいますか。

前半の部分は、文型を理解するようになっており、後半は、自動車の違いを考えるようになっている。

●仮説の検証

2つの自動車を比較する前に、音読を通して内容を把握できるように、教師と学習者で文章を繰り返し音読したり、往復したりしながら、確認をした。その後「つくり」の文章の所で、「どうしてそのようなつくりになっているのか」と発問をし、「つくり」の部分の行間を読み取らせることで、次の比較することが自然な思考の流れの中で考えることができたのではないかと考えている。バス・乗用車とトラックとの違いは、ワークシートでは、主語と、述語を理解させるために、つくりのところではあえて、「そのために、トラックは」に続けて書かせるようにした。バス、乗用車とトラックの比較では、挙手は多かったが、「荷物と人の違い」や「タイヤの多さの違い」を指摘する学習者が目立った。第4時のトラックとクレーン車とを比べる所では、第3時より多くの視点から自動車を比較することができた。分からない児童は、板書し

ている意見をワークシートに書き写している姿も見られた。授業中の発言やワークシートの記述では、文脈や行間を読んで自分の言葉で表現できていた。

## 2 実践事例2：「くじらぐも」（1年・光村図書）の場合

### (1) 教材の特性

体育の時間に体操をしている子ども達の前に、くじら雲が現われ、子ども達がやっていることをくじらが真似っこをすることから出会いが始まっている。高い所にいるくじら雲と下にいる子ども達の高低差を楽しみながら読み進めていける教材である。会話文が多いので、音読活動を十分に生かしながら物語の世界に親しんでいける。「天までとどけ、1, 2, 3」が3回出てくる場面は、音読の声の違いを確認しながら、読み取りができる。音読活動では、教師がわざと間違えた音読をし、揺さぶりをかけることで間違った音読の仕方から学習者が正しい音読に変えることで主体的に発言させていくようにさせたい。学習者が、なぜそのような言い方になおしたのか根拠も述べ、読み取りを進めていきたい。学習者の想像を豊かに膨らませくじら雲と仲良く遊ぶ様子を大切にしいきこの物語に同化しながら読み深めさせたいと考えた。

### (2) 研究仮説

- ① 教師があえて下手に読むことで、学習意欲を喚起し、音読の読み声の交流で読みが深まるであろう。
- ② 対話を通して登場人物の心情になって考えることができるであろう。

### (3) 単元指導計画

#### 主な学習活動

- 第1時 学校が好きなくじらの様子を本文からみつけよう。  
くじらとこどもたちとの出会いの様子を音読しよう。
- 第2時 くじら雲にのるまでのくじらとこどもの様子とを読み取り、音読をしよう。
- 第3時 くじら雲にのった子どもたちとくじらとはどんなことを言ったかを想像しながら言葉を考えよう。
- 第4時 子どもたちとくじら雲とが「さようなら」と言った後にどんな言葉が続くかを考えよう。

### (4) 教材の特性を生かした読解指導の授業展開

#### 研究仮説①

- i. 教師があえて下手に読むことで学習意欲を喚起し、音読の読み声の交流で読みを深める。
- 第2時 くじら雲にのるまでのくじらとこどもの様子を読み取り、音読をしよう。

発問

これから先生が読みます。先生の読みかたをよく聴いていて下さい。

音読場面

みんなは大きな声で「おうい。」とよびました。「おうい」と答えました。「ここへおい  
でよう」みんながさそうと「ここへおいでよう。」とくじらもさそいました。「よしきた。  
くものくじらにとびのろう。」男の子も女の子も、はりきりました。

T：先生の読み方上手だった？

C：上手じゃない。

C：「ここへ、おいでよう」のところがさ「ここへおいでよう」（小さい）っていついた。

T：じゃどんな風にいいのかわいてみて。

C：ここへおいでよう。

T：ここってどんな声でいったらいい？

C：中くらいの声。

T：その他にどうですか。

C：声が小さいのと、後、声が小さいと舞台の方に声が小さくて全然聞こえない。

T：じゃ、どこらへん変えた方がよかった。

C：「おうい」が普通の声でいついたから。

T：じゃどんなふうにいったらいいか言って。

C：おうい（大きくいう）

T：みんなどうだった。

C：聞こえた。めっちゃ聞こえた。

(中略)

T：先生は、ナレーターの部分言うから、

C：先生、松本先生が読んだ時、「 」がついていない所は小さく読んで、「 」が付いてい  
る所は、小さく読んでいたよ、よく聞いているね。みんなもそう思った。

C：うん、うん。

T：でもほんとはそこどうしたらいいの？

C：大きな声。

T：どうして。

C：「 」は大きな声でないと聞こえない。

T：聞こえないといやなことでもあるの？

C：楽しくなくなっちゃう。

T：どうして楽しくなくなっちゃうの？

(音読)

第4時 子どもたちとくじら雲とが「さようなら」と言った後にどんな言葉が続くか考えよう。

発問

また今度も、先生が読むからよく聞いて下さい。またみんなに聞くのでよく聞いていて下さい。

音読場面

「おや、もうおひるだ。」先生がうでどけいを見ておどろくと、「では、かえろう。」とくじらは、まわれ右をしました。しばらくいくと、がっこうのやねが、見えてきました。くじらぐもは、ジャングルジムのうえに、みんなをおろしました。「さようなら。」みんなが手をふったとき、4時間目のおわりのチャイムがなりだしました。「さようなら。」くものくじらは、またげんきよく、あおい空のなかへかえっていきました。

(音読が終わり)

C: だめー

T: どこがだめなの。

C: 「さようなら。」のところがつまらなそうにいていた。

T: どっちのさようなら。

C: どっちとも。

T: どっちとも? くじらのほうのさようならも。どんなふうにいえばいいの?

C: さようなら。

T: ありがとう。その他にどうですか?

C: なんかさ、さようならのところがロボットみたいだった。

T: ああそう。じゃどんなふうにいえばいいの。

C: さようなら。大きい声でいうの。

C: さようなら。

T: その他にどうですか。大きい声でいえばいいの。

C: 気持ちが入っていないし、「さようなら」のところが、さよおならって聞こえる。

T: じゃいってみて。

C: さようなら。(大きくいう)

(中略)

C: なんか、元気がなくて、つまらないから、もっと元気よくはっきりとした声でやったほうがいいと思う。

T: どちらへんが?

C: 「さようなら」とか「では、かえろうとか」、「おや、もうおひるだ」とか元気がないから、

大きく元気よくいったほうがいい。

T：でもさ、さようならっていった時、通りすがりの人に「さようなら」で挨拶することありませんか。

C：ある。ない。

T：あるよね。その「さようなら」とこっちの「さようなら」は違うの？

C：違う！

T：どうして

C：通りすがった人は近くだけど、くじらぐもは、遠いからくじらぐもの方が、元気よくいった方がいい。

C：さようなら。大声をだして、遠いから。

C：今のY君の言い方だと、首がこうなっているから（少し曲がっていること）風で聞こえなくなっちゃうから、風がふかないうちに「さようなら」というの。

T：かぜがふいていないうちに、どうやっていうの。

C：さようなら！（大きい声でいう）

（中略）

C：さっき言ったように、大きな声で元気よく心をこめて読む。

T：先生が、腕時計をみて驚くと書いてあるけど、ここはどんなふうに残らいいかな。

CT：驚いているんだから、もうちょっと大きく残ら方がいいんじゃないの。

T：なるほど、じゃどんなふうに残らいいの。

C：びっくりしてんだからさあ。もっとびっくりしたように、驚いたようにいった方がいいんじゃないの。

T：じゃ言ってみて。

C：おや、もうおひるだ！

T：ありがとう。じゃなんで先生は、驚いるの？ お腹がすいたの。

C：くじらと空の散歩しててそんな12時くらいになるまで気がつかないで、夢中になって遊んでいたから。

T：夢中で気がつかなかったんだ。

C：くじらがずっと遊んでいて後ろから、それで、あっ！やばい勉強さぼっちゃった。と思った。

### ●仮説の検証

教師がわざと間違った音読をすることで、どう残らよいかを自分で考え発言をしていた。教師が音読をしている最中に、間違っている所は学習者からも笑いが起きる等、おかしい音読をしているという認識があったようだ。普段声の小さい児童が大きな声で台詞を音読し発言をするようになっていた。発表の仕方でも、「〇〇君の言い方だとかうなっているから」「〇〇君と同じように」と友達の音読を意識しながら聴き自分の音読を堂々と発表することができていたようだ。「天まで届け、1, 2,

3」の台詞が3回出てくる場面では、声の大きさに合わせて、立体的な板書をするこ  
とで声の大きさを示した。授業の始めに音読した時よりも、気持ちを込めて音読する  
などその変容が著しかった。「なぜ、そう読んだのか。」との発問には、本文の文脈を  
もとにしてその理由を述べることはできなかった。

#### 研究仮説②

ii. 対話を通して登場人物の心情になって考えることができるであろう。

第4時 子どもたちとくじらぐもが「さようなら」と言った後にどんな言葉が続く  
か考えよう。

対話で開く授業について

文学教材で対話に開く授業といえば、『読者と登場人物との対話』、教材を介し  
ての『読者と読者との対話』が一般的である。そして、『登場人物と登場人物と  
の対話』となるが、肝要なのは、基本は、文章中にある『根拠』と、文脈から読  
み取れる「根拠」とを基にした対話でなければならない。<sup>5)</sup>

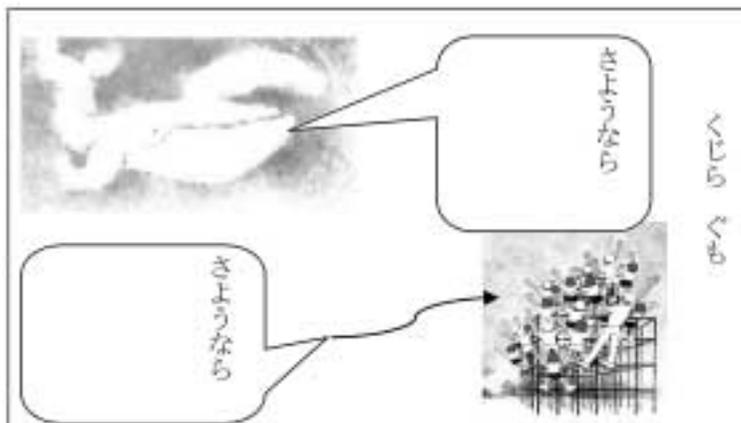
#### ●学習活動

くじらと子ども達との「さようなら」に続く後の言葉を吹き出しに書く。ここでの  
対話活動とは、子ども役とくじら役とを決め、子どもが「さようなら」に続く言葉の  
後に、吹き出しに書いた後、くじらがそれに対して、吹き出しに返事の言葉を書き込  
んでいく学習である。

「さようなら。」みんなが手をふった時、4時間目の終わりのチャイムがなりだし  
ました。「さようなら。」くものくじらは、また、げんきよく、あおい空のなかへか  
えっていきました。

#### ●ワークシート

ワークシート例



## ●学習者の記述

子ども	くじら
A1：ああ、帰っちゃった。また会えたらくじら雲に乗りたくないな。	A2：また、あの学校の子ども達と会いたいな。
B1：また、会った時に、一緒に遊ぼうね。楽しかったよ。ありがとう。	B2：また、会ったら空へ飛んで行って空の中を探検しようね。
C1：元気でねー。また、体育で会おうね。また散歩しようね。	C2：また、来てねー。待ってるから。でも、そっちもきてね。4時間目にいるからね。
D1：また来て遊ぼうね。また背中に乗せてね。	D2：また乗せてあげるよ。またね。バイバイ。
E1：今日は乗せてきてくれてありがとう。また、学校に来てね。今度は学校の友達を紹介するね。お誘いありがとう。	E2：また、元気に学校へくるよ。君達も元気でね。僕といつか遠足へ行こうよ。ありがとう。

## ●仮説の検証

どちらの役になるかは、スムーズに決めることができた。一人が書いている間、もう一人は書いているのを見ているなど書き終わるまで友達を待つことができた。文の初めや文中に「また」という副詞がついているのがほとんどであるため、再び会って遊びたい、会いたいという心情に迫ることができていた。1年生の11月の時期で、二人で対話で開く表現活動ができることに本学習活動の有効性を感じた。子どもの言葉に対してくじらもきちんと返答しているのが感動的であった。学習者のワークシートからは、文脈から読み取れる内容を基にして対話に開いていることが分かる。「一緒に遊ぼうね」「また背中に乗せてね。」「今度は学校の友達を紹介するからね」など本文の文脈から感じ取り、自分の思いを追加しながら書くことができた。

## IV 考察と課題

## 1 「じどう車くらべ」

題名読みは、自分の知っている自動車から多くの名前や種類を想起することができ、本文の内容に入る前に学習意欲を喚起できると思う有効な方法である。「自動車」という乗り物が学習者の身近にある生活に密着した物であるため、学習者の経験からも引き出されたと考えることができる。また、自動車の比較をする学習活動の前に、「どうしてこのようなつくりになっているのでしょうか。」との発問からは、「たくさん現場に持っていくため」や「大きい荷物を運ぶためにトラックは広い荷台になっている。」などの発言がでてくる。「つくり」について考え自分の言葉で語ることができた証であろう。その後比較を考えさせたことで、思考が広がっていったと考える。例えば、「クレーン車は止まって仕事をするけど、トラックは走って仕事をする。」や「トラックは、地面で荷物を運ぶけどクレーン車は空中で運ぶ。」など文脈や

行間から読み取ることができていた。一般的には、一つ一つの自動車を読み取ることに力をいれるが、比較させたことで、一つ一つの自動車をより浮き彫りにさせることができたと思う。1時間の授業の中で、2つの自動車を比べ、違いに焦点化することでより自動車の特徴を見出すことができた。

自身の実践もそうであったように従来の指導であれば、自動車ごとで縦に教材を区切って文章の関係性を考えずに読み取っていたが、前時に学習した自動車を本時の自動車と比較することで、文章全体を読み取り、違いを探することで論理的な思考力を育成できることが分かった。1年生で初めて本格的な説明文教材の読解の扱いになるため、初めの方は読み取っていくのに時間がかかったが、何回か続けていくうちに違いを見つけることが早くなっていった。

## 2 「くじらぐも」

教師がわざと間違えて読む音読は、学習者が楽しみながら間違いを見つけ、自分の表現で音読ができる効果的な指導であると実感した。「どうしてそのような読み方をしたのか」という理由を本文から根拠を述べて言うのはまだ難しかったが、間違いを指摘でき正しい音読になおすことはできていたため、今後の学習にも生かしていきたい。また、相手意識を持って音読することができたため、友達の音読にも興味を持って聴いていることが分かった。学習者のどんな発言を価値づけるのかは教師の最大の仕事である。今後の課題である。対話のワークシートでは、相手を意識して想像豊かに書かれているものが多かった。文脈を読み取って自分の言葉で書かれていたため効果的な学習活動であったようである。

## 3 二つの教材を通して

2つの教材を通して、音読等の声に出して読み取っていくことの重要性を感じた。一人ひとりの音読もそうであるが、グループ読みや一斉読みなどみんなと一緒に読むことの楽しさを味わうことが大切であると考え。また、説明文教材、文学教材でも、「違いを見つける」という学習活動は共通して学習者の学習意欲を喚起させ読解力につながる重要な視点であると考え。

教材の特性をいかに生かすかで、学習者が自分の言葉で考え、発言したり、書いたりなど従来の視野の狭い指導法から文章全体から大きく読める読解へと変えることができた実践であった。

## V 今後の展望

新学習指導要領になり、論理的思考力や表現力の育成が、読解力を高めていく指導と教師の授業力の向上とが今後ますます重要になる。今回、表現に開く読解指導の授

業を展開したことで、学習者が変わる実感を得た。従来の読解指導がなぜ閉じられた表現ばかりであったのかを振り返ってみると、教材に縛られるのではなく、「教材の特性を生かした授業」へと発想の転換を強く感じた。今後も表現に開く授業の展開に挑戦していきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 長崎伸仁著『新国語科の具体と展望「習得⇔活用型」授業の創造』2010年，メディア工房ステラ
- 2・3) 長崎伸仁・山口国語授業研究会著『論理力をはぐくむ国語の授業』2008年，三省堂
- 4) 長崎伸仁著『新しく拓く説明的文章の授業』1997年，明治図書
- 5) 長崎伸仁・石丸憲一編著『表現力を鍛える文学の授業』2010年，明治図書